



CONTENTS

総合博物館リニューアル特集

- 01 「総合博物館リニューアルの狙い」
- 03 常設展示 「北大の学び舎」
- 05 研究紹介⑩
ドイツで見つけた新種の日本産コチ科魚類「ワニゴチ」
- 07 リニューアルオープン記念企画展示
「ランの王国」開催
- 08 常設展示(収蔵標本の世界) 「生物標本の世界」
- 10 博物館実習

「総合博物館リニューアルの狙い」

●2016年7月26日



リニューアルオープン記念式典にて北海道大学山口佳三総長による挨拶

1年4ヶ月の長い休館期間を終え、7月26日、総合博物館はリニューアルオープンを迎えました。既にご来館いただきましたでしょうか。ここでは再オープンまでの経緯をひも解きつつ、展示室に通底するコンセプトを皆様を紹介いたします。

この度の展示リニューアルは、2014年10月から始まった耐震改修工事を端緒としています。すでにご来館いただきましたでしょうか。ここでは再オープンまでの経緯をひも解きつつ、展示室に通底するコンセプトを皆様を紹介いたします。



完成したバリアフリー玄関ならびに木製デッキ

ない状況であったため、結局すべての展示室が耐震改修工事の影響を受けることになりました。このような状況は博物館にとって、ただの災難でしょうか。当館は半世紀に一度しか訪れない好機ととらえ、2014年12月、展示リニューアルの方針を打ち出しました。それは次の2つです。(1)本学の魅力をすべて魅せること。(2)より愛される博物館になること。この2つの方針が展示としてどのように展開されたのか解説します。

(1)は、当館が北海道大学の総合博物館としてどうあるべきかを再考する過程で生み出されました。大学の博物館として対象となる来館者層を挙げるとすれば高校生が一つの候補となります。そこで彼らに訴求する展示を検討したところ、学部を切り口に大学を紹介する展示が有効と判断されました。そこで「365日オープンキャンパス」をうたい文句に、本学に展開している全12学部各々の展示室からなる「北大の学び舎」エリアを整備しました(詳しくは3ページの常設展示「北大の学び舎」を参照ください)。ほかにも、本学の一押し研究を紹介する「挑戦する北大」エリアや、研究所や研究センターなど研究の最前線を紹介する「北大の探求心」エリアも新設しました。これらの

展示内容は関連組織によって変えることができます。そのため、今後も陳腐化することなく、本学の魅力を発信し続ける拠点として機能するのではないのでしょうか。

(2)は、ユニバーサルミュージアム(すべての人に開かれた博物館)をめざす動きの中から芽生え、「知の交差点」ゾーンとして結実しました。そこは、誰もが気軽に知の刺激を分かち合える場になることをめざしたものです。誰もが気軽に参加できる場にするためには様々なバリアを取り除かなくてはなりません。まず物理的なバリアが頭に浮かびがちですが、心理的なバリアを低減させることも重要でしょう。そこで今回のリニューアルでは館内にカフェを誘致したり、快適なトイレを数多く新設したり、休憩スペースを設けたりと、気楽にくつろぐための雰囲気作りを重視しました。入館料無料を継続できたことも心理的バリアの低減につながっていると思います。さらに、6月から10月の金曜日に限られますが、開館時間を午後9時まで延長したことも見学環境の改善につながっているのではないのでしょうか。物理的バリアの低減についても紹介します。当館の正面玄関にはスロープが設置されていますが、傾斜がきつくと、車椅子やベビーカー利用者を想定した改善が必要でした。しかし、歴史的建造物と言える当館の正面玄関に手を加えることは難しく、打開策として正面玄関とは別にバリアフリー玄関を設けることにしました。それが11月4日に竣工したバリアフリー玄関ならびに木製デッキです(左下)。ユニバーサルミュージアムをめざす当館を象徴するように、バリアフリー機能をしっかり備えつつも明るく入りやすい雰囲気作りを心がけました。

このように、当館はこれからも皆様に親しまれ、そして刺激を与え合える開かれた大学博物館でいられるよう努めます。引き続き皆様のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

山本順司
(研究部准教授/地球科学)

リニューアルオープンの1日



学生による歓迎のスピーチ

爽やかな夏空に恵まれた7月26日、総合博物館前にはリニューアルオープンを待ちわびる多くの方が開館前から並んでくださいました。開館時間の10時には、ミュージアムマイスターの日下葵さん(理学院修士1年)が歓迎のスピーチを行い、14名の学生が皆様を館内へと順次ご案内しました。彼らは、大学院の授業「博物館コミュニケーション特論」の受講生で、各自の専門分野を活かし、この日のために

リニューアルオープン記念
学生による展示解説ツアー

2016年7月26日、北大総合博物館がリニューアルし、新たな活動がスタートする日。そんな記念すべき日に行うイベントの企画を任せられ、実施したのは私たち14名の学生でした。なぜ学生に、と感じる方もいらっしゃると思います。その理由は、イベントの企画・実施・評価を通して学生にコミュニケーション能力やマネジメント能力を習得させることを意図した「博物館コミュニケーション特論」という大学院の授業に私たちが参加していたからです。これまでもこの授業から様々なイベントが実施されてきました。

今回私たちが企画したのはガイドツアーです。このツアーの特徴は少人数対応制で、参加者の年齢や知識、興味に応じてコースや解説を変えて、柔軟性を持たせるという点です。また、この企画では、2つの目的を設定しました。1つはリニューアルオープン当日に行うため、新旧の博物館で変わった点を知っていただくこと。もう1つは北大生らしさを活かし、自分たちの専門に関わる展示を紹介することです。これらの目的を達成するため、解説の内容や方法



博物館前でテープカット(左から、川端理事・副学長、小泉初代館長、石森北海道博物館長、山口総長、中川館長)

特別な展示解説ツアーを企画・実施し、さまざまな年代の来館者と博物館をつなぐ役割を果たしました。また、博物館ボランティアによるポプラチェンバロコンサートは満席になる盛況ぶりでした。

午後からは理学部大講堂にて、リニューアルオープン記念式典を実施しました。学内関係者やご協賛企業の皆様、総合博物館関係者が参加する中、中川光弘館長の式辞の後、北

について議論を繰り返し、リハーサルを重ね、準備しました。

当日は家族連れが多く、子どもからお年寄りまで様々な方がツアーに参加してくださいました。私たちは、参加者の興味や関心に配慮したガイドを行うことに努めました。その甲斐あってか、解説にうなずきながら熱心に耳を傾けていただけた様子が見られました。ツアーには視覚に障がいのある方も参加されましたが、音や感触で楽しめる展示を中心に案内した結果、「見ることはできないが、感じることで楽しい」との感想をいただきました。ガイドツアー後に実施したアンケートでは、目的であった新旧博物館の違い、専門に関わる展示解説について理解していただけたことが分かりました。



さまざまな年代の来館者と対話しながら解説を進めた

海道大学山口佳三総長からご挨拶をいただき、来賓の北海道博物館石森秀三館長、総合博物館の小泉格初代館長から祝辞を賜りました。続いて、江田真毅講師より総合博物館リニューアルの概要について説明を行いました。その後、総合博物館正面玄関前に移動し、石森北海道博物館長、小泉初代館長、山口総長、川端和重理事・副学長、中川館長によるテープカットを行い、続く内覧会では館内各所を博物館教員が解説案内いたしました。

夕方から、ファカルティハウス「エンレイソウ」レストランエルムで行われた記念祝賀会にも多くの関係者、来賓の皆様にお集まりいただき、当館と相互協力協定を結んでいるむかわ町竹中喜之町長、ご協賛企業を代表しまして株式会社AIRDO谷寧久代表取締役社長よりスピーチをいただきました。途中、リニューアル初日の来場者が、2,091名との発表があり、会場からは大きな拍手が起きました。関係各位、ご協賛いただきました皆様のご協力により、無事リニューアルオープンを迎えることができましたことをお礼申し上げます。(事務局)

最後になりますが、ツアーに参加してくださいました皆様に心よりお礼申し上げます。

担当教員: 湯浅万紀子・藤田良治

担当学生: 安 翔宇・磯野 雄生・Ihsan Naufal Muafiry・金井 千鶴子・Gamma Abdul Jabbar・田中 望羽・手島 駿・道藤 俊・増田 彩乃(理学院)、江間 章斗(情報科学研究科)、久保直紀(総合化学院)、佐藤 加奈・杉山 和香奈(文学研究科)、垣内 ルイ(教育学部)

久保直紀
(総合化学院修士1年)

杉山和香奈
(文学研究科修士1年)



丁寧な解説はご好評をいただいた

総合博物館リニューアル特集

常設展示

「北大の学び舎」

「北大の学び舎」は、人文・社会・自然科学を網羅する本学の全12学部を紹介するエリアです。各学部の展示スペースでは、それぞれの学部に応じたような学科があり、どのような教育や研究が展開されているのか、そして卒業生がどのような進路を選択しているのかを紹介しています。また、各学部で学ぶ学生の生の声を反映させる黒板や、プレスリリースやセミナーの告知などの学部の情報を示す掲示板とラックも設置しています。

「北大の学び舎」でぜひ注目いただきたいのが、各学部の一押し研究者の研究紹介です。各学部にご推薦いただいた今が旬の研究をされている先生方に取材を敢行し、その研究についてQ&A方式でまとめました。本学で日々進展している最先端研究の数々。その一端に触れられるのが大学博物館ならではの魅力であると自負しています。

「北大の学び舎」はメインターゲットを高校生としています。修学旅行などで総合博物館を訪れた全国の高校生が、自身の興味や目標を満たすためにどの学び舎を目指せば良いのかを考える場を提供できればと願っています。

●文学部



タッチパネルと環北太平洋地域の地図を備えたToNP（トンピー）が最初に目に飛び込んでくる文学部の展示スペース。ToNPではアイヌやアリュートなどの昔話を讀んだり、ことばや歌を聞いたり、その世界に触れることができます。一押し研究は池田透教授のアライグマをはじめとする外来種の防除対策研究です。侵入先の生態系を破壊し、農業被害を引き起こす外来種。その効果的な対策には対象種の生態や行動などの自然科学的視点に加えて、管理する側の人間社会をどう動かすかといった人文・社会科学的視点も欠かせません。

●医学部



医学部の展示スペースには総合博物館の触れる展示の中でも一に争う人気の装置、腹腔鏡手術の練習セットがあります。北大の医学部で開発され、実際に北大病院の外科医が手術の練習に使用しているセットを博物館仕様に改造していただいたものです。一押し研究は、呼吸等で微妙に変わるがんの位置を金マーカーでとらえて陽子線を照射する治療システムの開発（白土博樹教授）と、病気になる前（未病状態）の体の小さな変化を脂質に着目してとらえる病気の予防システムの開発（千葉仁志教授）が二本立てで紹介されています。

●歯学部



歯や口の模型がずらりと並んだ歯学部の展示スペース。どうぞ優しく手にとってご覧ください。また実際に学生実習でも利用している口を開けたマネキンも展示されています。用意されている白衣を身に付け、診療用の手鏡を利用してマネキンの歯を覗いてみてください。一押し研究は網塚憲生教授の臓器としての骨の研究です。私たちの身体を支える支柱である骨。しかし骨の役割はそれだけではありません。腎臓や副甲状腺、膵臓、さらに中枢神経などと影響を及ぼしあって人体の機能を調節する役割もあります。

●薬学部

薬学部の展示スペースでは、薬用植物の薬用部位を乾燥させた「全形生薬」標本を中心に様々な生薬の標本とその薬効が展示されています。その種類は下剤として用いられるダイオウ、胃の消化を助ける作用のあるゲンチア



ナ、抗菌作用と防虫効果のあるオウバク、滋養強壮に良いとされるタツノオトシゴやオオヤモリなど22種類にも及びます。生薬の薬理作用には現在でも解明すべき謎が数多く残されています。一押し研究として、秋田英万准教授の遺伝子を目的の細胞に取り込ませるシステムの開発が紹介されています。

●工学部



工学部の展示スペースは一押し研究者、永田晴紀教授のCAMUI型ハイブリッドロケットの紹介から始まります。CAMUI型ロケットの燃料は、買い物袋などにも利用されるポリエチレン。火薬類や危険物を使用しないため、安全管理のための費用を大幅に削減し、ロケットを経済的に小型化できるといいます。このほか、展示スペースは工学部の研究者が開発に関わったモノでいっぱい。おしゃべりロボットのChapitや遠友学舎の模型などが展示されるとともに、切なく楽しくアルゴリズム技術の威力を教える「フカシギの数え方」も上映中です。

●理学部



毎週黒板の内容を更新している理学部。分かりやすい文章で理学部の先生方の研究やイベント、理学部に関連した時事情報などを紹介

しています。内容が次々に更新されるため総合博物館の展示解説スタッフ泣かせの一面もありますが、理学部の学生やリピーターの皆様には大変好評なようです。一押し研究は坂本尚義教授の研究です。同位体顕微鏡という独自に開発した分析装置を用いて隕石を観察することから宇宙の成り立ちを調べています。また現在の北海道大学の総長・山口佳三博士の論文も展示されていますので探してみてください。

●水産学部



水産学部にはおしよろ丸という練習船があります。2014年3月におしよろ丸Ⅸ世が進水式を迎え、Ⅳ世は引退となりました。水産学部の展示スペースでは、歴代のおしよろ丸で実際に利用されていた舵輪や学生用の長椅子を展示しているほか、起工式や造船中の様子、さらに海洋での乗船実習の様子の映像が上映されています。また北大の研究者に命名された魚の標本の展示もあります。一押し研究として、宮下和夫教授の海藻に含まれる色素・フコキサンチンの抗肥満作用や抗糖尿病作用を明らかにした研究が紹介されています。

●獣医学部



たくさんの骨格標本が並んでいる獣医学部の展示スペース。展示されている標本のほとんどは教育・研究のために実際に北大の獣医学部で解剖された後、標本化されたものです。標本はいかにも獣医師が対象としそうなウシやウマに限りません。ライオンやゾウ、カバなどの哺乳類、ダチョウやアヒルなどの鳥類、それにソイヤウバザメなどの魚類、爬虫類であるキモオトカゲや両生類のエゾアカガエルまで含まれています。獣医学部の一押し研究者は

喜田宏名誉教授。そのインフルエンザウイルスに関する研究が紹介されています。

●農学部



北大の源流、農学部。北大の前身が札幌農学校であることをご存知の方も多いものと思います。農学部の展示スペースでは、農学部に関連した古き良き建築物の模型とともに、動物の死体や糞に集まるエンマムシや性が逆転したトリカエチャクテなど、農学部の研究者が研究してきた昆虫などの標本も展示されています。一押し研究は藤野介延准教授と山田哲也講師のダイズの遺伝子に関する研究です。サンゴクラゲに由来する光るタンパク質を遺伝子組換え技術で導入した赤や緑に光るダイズ種子もぜひご覧ください。

●経済学部



「地域の経済とコミュニティの同時活性化のために」と題された西部忠教授の研究を紹介する一押し展示のケース内は、まるでおもちゃ箱をひっくりかえしたよう。国内はもとより海外のものも含む色鮮やかな多数のコミュニティ（地域）通貨が所狭しと並んでいます。特定のコミュニティ内でのみ流通する利子のつかないお金、コミュニティ通貨。多くの地域で実施されましたが、休止、停止した例も少なくないといえます。西部教授は持続可能な体制の構築には、コミュニティの総合的な検診、コミュニティ・ドックが必要と説きます。

●法学部

法学部の展示スペースには、司法の象徴としてしばしば用いられる正義の女神（テミス・



ユスティティア）の像が展示されています。手にした剣と天秤はそれぞれ力と衡平を、目隠しは紛争当事者の身分や貧富にとらわれない判断、法の下での平等を表すとされています。一押し研究者は警察ドラマの影響で警察官になりたいと思い、そのために刑法の勉強を一生懸命にしたという佐藤陽子准教授。感情的なものには排除して、誰もが妥当と思える結論に至る理屈を考えるのが刑法。目指すのは、「美しい理屈」です。

●教育学部



「北大の学び舎」のラストを飾るのは教育学部です。松本伊智朗教授の研究が一押し展示として紹介されています。テーマは「子どもの貧困」です。松本教授が大学院生だったころのノートやカセットテープ、聞き取りカードが展示されています。今でこそ重要な政策的課題として認識されている子どもの貧困。実は松本教授が大学院生であった1980年代半ばにはほとんど認識されていなかったといえます。当時、児童養護施設で中学生の学習ボランティアをしていてこの問題に気づいた松本教授のノートには「子供の貧困」の文字がはっきりと残されています。

「北大の学び舎」の展示は関連する部局の教職員の方々のご協力を得てはじめて制作できたものです。お忙しい最中にもかかわらず展示準備にご尽力いただいた皆様にこの場を借りて改めて厚くお礼申し上げます。

江田真毅

（研究部講師／動物考古学）

研究紹介(3) 総合博物館教員の研究紹介として、新たに水産科学館長に就任した今村央教授(魚類系統分類学)の研究をご紹介します。

研究紹介②

ドイツで見つけた 新種の日本産コチ科魚類「ワニゴチ」

今村 央

(水産科学館長・水産科学研究院教授/魚類系統分類学)

図1 *Platycephalus guttatus* のホロタイプ



図2 「日本動物史」に掲載された
Platycephalus guttatus の描画



私は魚類の系統分類学について研究しており、大学院生時代から特に力を入れているのはコチ科魚類の種多様性の解明についてです。コチ科魚類とはカサゴ目に属する底生性魚類で、主にインド・西部太平洋の熱帯から温帯にかけての水深200m以浅に生息しており、世界から約80種、日本からは約20種が知られています。本科魚類は頭と体がよく縦扁する、頭に通常多くの棘を持つなどの特徴があり、他の魚類との識別は比較的容易です。しかし、コチ科の中ではよく似た種が多く、分類学者にとっても識別が難しい場合があります。今回は私が行ったコチ科魚類の研究の中で、特に印象に残っている研究についてご紹介します。

日本産コチ科魚類にワニゴチと呼ばれる種類がいます。全長50cm以上にもなる大型種で、食用にもなり、南日本から南シナ海にかけて分布しています。本種には従来は *Inegocia guttata* という学名がつけられていました(もともとは *Platycephalus guttatus*

とされていましたが、のちに *Inegocia* トカゲゴチ属に移され、種小名の語尾も変化しました)。この学名はフランスの博物学者ジョルジュ・キュービエが1829年に命名したものです。本種のホロタイプ(種の基準になる標本)は日本から採集され、現在はドイツのフンボルト大学博物館に収蔵されています(図1)。この博物館には他に7種のコチ科魚類のタイプ標本が収蔵されているため、2006年にこの博物館を訪問し、これらの標本を観察する機会を得ることができました。*I. guttata* のホロタイプを観察し、プローションなどのデータをコンピュータに入力し、過去に観察した他のワニゴチの標本データと比較してみました。その結果、データが一致しない点があることが分かりました。吻長(眼窩の前縁から上顎の先端までの長さ)が他の標本より明らかに短いのです。この標本は剥製で、体表にニスが塗られているために確認が難しかった部位があったのですが、これらを改めて丁寧に観察したとこ

ろ、鰓蓋の下方に皮弁がないこと、体前部の側線鱗に1個の開孔があるなど、ワニゴチにはない特徴をもつことが新たに確認されました(ワニゴチでは大きな皮弁があり、開孔は2個)。これらの特徴を持つ日本産種はイネゴチ *Cociella crocodila* しかいません。つまり、*I. guttata* のホロタイプは実はイネゴチであり、よって *I. guttata* と *C. crocodila* は同種ということになります。*C. crocodila* の命名者もキュービエで、*I. guttata* と同じ出版物に新種として記載しています。命名法のルールブックである「国際動物命名規約」によると、この場合はどちらの名前を用いてもよいのですが、イネゴチの学名を変更させると混乱が生じるので、従来通り *C. crocodila* とするのが妥当と判断しました。さて、そうなるワニゴチが宙に浮きます。学名を失ったことになり、つまり「新種」となってしまったのです。そこで、ワニゴチに対しては2010年に *Inegocia ochiaii* という学名を与え、新種として発表することになりました。なお、*ochiaii* という種小名は、日本産コチ科魚類の分類学的研究で著名な研究を残された落合明先生に因んで命名しました。

では、なぜワニゴチに対して誤って *I. guttata* の学名が用いられていたのでしょうか。私は「犯人」はテミンクとシュレーゲルの2人だと考えています。彼らはシーボルトが編纂した「日本動物史 (Fauna Japonica)」の魚類セクションを執筆した著名なオランダ人研究者で、1843年に本書の中で *P. guttatus* としてワニゴチを記載する際、1枚の正確な描画もあわせて掲載しました(図2)。種小名の *guttatus* は「斑紋のある」という意味です。イネゴチでは体の前半部だけに小さな黒色班が散在しており(図1)、これが *guttatus* の名前の由来となったのだと思われます。しかし図2にも描かれているように、ワニゴチにも体中により小さな黒色班が密に分布しています。テミンクとシュレーゲルはワニゴチのこの特徴を観察し、ワニゴチを「これぞまさに *guttatus* !」と勘違いをしまい、さらに悪いことに彼らの描画がとても正確に描けていたため、この描画を見たのちの研究者に間違った *guttatus* のイメージが伝わってしまったのではないかと、私は推測しています。

深海魚同定 トレーニングコースを開催

●2016年7月11日～15日

2016年7月11日から15日にタイ王国プーケットにあるソクラー大学プーケットキャンパスにて、深海魚を同定するためのトレーニングコース「Training course on identification of deep-sea fishes from Andaman Sea」が開催されました。本トレーニングコースはタイ王国海洋沿岸資源研究開発機構のプーケット海洋生物学研究所が主催し、講師として総合博物館の河合俊郎助教と京都大学の田城文人特定助教が招待されました。タイ国内の研究機関(海洋沿岸資源研究開発機構、国立科学博物館、東南アジア水産開発センター、ソクラー大学)から25名、中国の第一海洋研究所から2名の研究者が本トレーニングコースに参加しました。東南アジア周辺の深海域の魚類相はこれまでほとんど調査されてこなかったため、標本もほとんど知られていません。本トレーニングコースでは1999年から2000年にインド洋東部のアンダマン海にて採集された深海性魚類の標本を用いました。参加者はこれらの標本を用いて、科・属・種への同定方法を学びました。本トレーニングコースの1日目は深海魚の同定方法や標本の作製方法についての講義が行われました。2日目から4日目にかけては、標本を用いて深海性魚類の同定を行いました。5日目は参加者による研修成果の発表と河合助教による本トレーニングコースの総括が行われました。今後、プーケット海洋生物学研究所が中心となって、新たにアンダマン海の深海性魚類調査を行う方針が示されました。

河合俊郎

(研究部助教/魚類系統分類学)

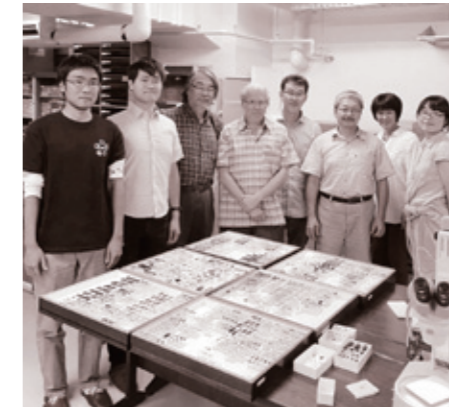


トレーニングコース参加者

国際ワークショップ

「Cucujiformia Workshop」 (甲虫類ヒラタムシ系列ワークショップ) を開催

●2016年8月27日



レッシェン博士を囲んで

ニュージーランドから甲虫の専門家 Richard Leschen 博士を特任教授として招へいたのを機に、8月27日、国際ワークショップを開催しました。昆虫甲虫類は約40万種が知られており、地上の生物では最も種数の多い分類群です。なかでも食肉亜目に含まれるヒラタムシ系列は、ゴミムシダマシ科、カミキリムシ

科、ゾウムシ科などを含む大きな分類群で、甲虫類の中でも分類や系統関係が混乱しており、甲虫を長く研究している専門家でも詳細までを理解し把握することが困難と考えられている分類群です。Leschen 博士は2010年にハンドブックの執筆、監修をしており、ヒラタムシ系列の最新の分類と系統を理解している世界でも数少ない研究者です。今回の国際ワークショップは、ヒラタムシ系列についての最新の詳しい研究内容を、博物館の標本を観察しながら解説する講義内容でした。午前中は、パワーポイントを用いた座学で、受講者の理解程度を確認しながら基礎的な分類・系統について説明されました。午後は標本庫へ移り、日本の受講者には馴染みのないオーストラリアのヒラタムシ系列甲虫標本を観察しながら、解説をされました。

参加者は11名で、甲虫分類に長年携わってきた研究者が5名、農学研究院院生・学生が2名、総合博物館ボランティアが4名でした。東京から遠路参加した研究者もあり、ワークショップが充実した貴重な機会であったことを確認しました。

大原昌宏

(研究部助教/昆虫体系学)

博物館研究会(第3回、4回)の開催

●2016年6月18日、6月29日

総合博物館では、6月18日(第3回)、6月29日(第4回)に博物館研究会を開催しました。第3回博物館研究会は、文化プロデューサーの伊藤恵氏(アクティブKEI)から、大学博物館とミュージアムショップをテーマに幅広い話題が提供されました。翌月のリニューアルオープンを前に、総合博物館のショップ関係者も参加し、熱心に意見交換を行いました。

第4回博物館研究会は、国際ワークショップ「Rethinking sharing information of researchers and collections in Museum between Taiwan and Japan: focused on natural scientists in the early 20th century」として開催されました。総合博物館の高橋英樹教授による「Kudo Yushun-a Japanese botanist」をはじめ、本川雅治氏(京都大学総合博物館)、「Zoological research in Taihoku Imperial University」、于宏燦氏(台湾大学生命科学院)「A glimpse into biological endeavors in early 20th century in Taiwan -



国際ワークショップの様子

contribution by the Natural History Society of Formosa」、そして呂紹理氏(台湾大学歴史学系)「Bio-exchange and Resources Control within Colonial Taiwan and Japanese Empire: A case study on Agricultural Experimentation Station」の4件の研究発表が行われました。フロアからの熱心な質問に加え、各発表への有益な情報提供もあり、発表者、参加者が相互に刺激を与えあうワークショップとなりました。

山下俊介

(研究部助教/映像資料学)

リニューアルオープン記念企画展示

「ランの王国」開催

●2016年8月5日～9月25日



展示図録「ランの王国」
(北大出版会)



資料部長秋元教授(左)と礼文町小野町長による
テープカット



展示室に並ぶボタニカルアート

企画展示「ランの王国」は8月5日より9月25日まで1階企画展示室で開催されました。ラン科は陸上植物の3大科の一つとされ、2万種にも及ぶ種多様性を誇ります。本企画展示では、ラン科の特徴や多様性と分類体系、人間文化との関わりに加え、花と昆虫との共進化・生物間相互作用などを分かりやすく解説し、植物生態学・進化学への興味を引き出す展示を試みました。また、盗掘や環境破壊などによるラン科植物の減少、絶滅危惧種問題についても紹介し、自然保護・環境保全について考える契機とすることを目指しました。

8月5日のオープニングセレモニーでは、礼文町の小野徹町長、総合博物館資料部長の秋元信一教授によるテープカットを行いました。開催期間中は、様々な関連イベントを開催し、公開セミナーでは北大植物園の永谷工氏に歴史ある植物園ラン科コレクションについてお話いただきました。また礼文島と小笠原諸島でのラン科植物保全の現状・課題についてのセミナーでは礼文町高山植物園の村山誠治氏、父島の東京都レンジャー・川口大朗氏のお話を伺い、礼文町の「あつもん」と小笠原村の「メグロン」といったご当地キャラクターも登場し、来館者を楽しませてくれました。

今回の展示では、「ボタニカルアート」と「花の香り」の効果的活用を目指しました。札幌市の植物画グループ flos society による色鮮やかで繊細なボタニカルアートは、企画展示室内だけではなく、カフェや多目的スペースからなる知の交差点エリアに彩りを添えてくれました。

展示室内には、宇都宮市の堀江紀子氏、札幌市の船迫吉江氏の両植物画家のラン科植物作品が展示され、週替わりでランの香りを応用した化粧品や香水の香りが来館者をお迎えしました。日本原産の「フウラン」の昼と夜の香りの違いを実際に体験できる展示コーナーも用意しました。会場内での展示解説にはミュージアムマイスター認定コースの学生も参加してくれました。また、博物館ボランティアの協力も得て開催した調香体験ワークショップでは、フウランの香りをベースに、様々な香りビーズをブレンドするオリジナルのにおい袋作りを行い、大好評いただきました。他にも、企画展示に関連する曲を集めた演奏会では、ポプラチェンパロの音色に心地よいひと時を過ごしていただけたのではないのでしょうか。

最後に、展示にあたっては、多くの団体・自治体・研究機関・個人等の協力を得ました。上述した以外にも展示制作や展示図録編集で協力していただいた、国立科学博物館筑波実験植物園の遊川知久博士、熊本大学の杉浦直人博士、オーストラリアパースのキングスレイ・ディクソン博士、中国科学アカデミー植物学研究所のイボ・ルオ博士、花王香料開発研究所の窪田正男氏の各位に深謝いたします。展示図録『ランの王国』は北大出版会から販売中ですので、より詳しい内容をお知りになりたい方はぜひご購入ください。

高橋英樹
(研究部教授/植物体系学)

日本花粉学会学術賞を高橋英樹教授が受賞

2016年10月1日に茨城県日立市で開催されました日本花粉学会第57回大会において、「花粉の微細形態・形成過程の解明による植物形態学・系統分類学への貢献」により、総合博物館の高橋英樹教授が日本花粉学会学術賞を受賞されました。

日本花粉学会 Palynological Society of Japan とは花粉学の研究およびこれに関連する科学の進歩および普及をはかることを目的として1965年に設立された学会です。花粉症・空中花粉などを対象とする医学系研究者、花粉分析による古植生の復元を専門とする古生態研究者などを中心に、植物花粉の生理学・形態学・遺伝学などを専門とする研究者が加わった分野横断型の学会です。高橋教授のツツジ科イチヤクソウ亜科・シャクジョウソウ亜科、モウセンゴケ科などの花粉の微細形態・形成過程研究が評価され、今回の受賞につながりました。さまざまな植物群における花粉の形態・機能研究の、さらなる進展を期待したいと思います。

常設展示 「収蔵標本の世界」

3階常設展示「収蔵標本の世界」では、総合博物館が所蔵する300万点を超える標本の一部を展示しています。本号から、展示室毎に取り上げ、紹介してまいります。

常設展示

「生物標本の世界」

北海道大学の前身は1876年に開学した札幌農学校であり、開拓や農林水産業の基礎となる生物分類学が伝統的に盛んです。膨大な標本を蓄積し、多くの分類学者を輩出してきました。中でも陸上植物、菌類、海藻、昆虫、魚類などは国内屈指の充実した標本コレクションを擁し、それぞれの分野における世界的な研究拠点の一つです。この展示室「生物標本の世界」では、これら貴重な標本コレクションについて、人物や歴史などにも触れながら紹介しています。

札幌農学校2期生で後に教授となる宮部金吾は、植物学の世界的権威として活躍しました。現在の生物学では菌類や藻類は厳密には植物ではありませんが、当時はいずれも隠花植物と呼ばれる下等な植物とされていました。当館の陸上植物、菌類、海藻いずれの標本コレクションにも、宮部の活躍が大きくかかわっています。陸上植物標本庫のルーツは、札幌農学校植物学教室に隣接し宮部らが運営にあっていた1891年の「植物標品室」で、1903年に現キャンパスに移転、レンガ造り2階建ての標本庫が開館しました。この標本庫を宮部は「わが子」のようにいつくしみ、後に引き継いだ館脇操博士も充実に努めました。その後、農学部本館を経て、現在は当館3階の一角に収蔵されています。江戸時代の蝦夷地植物標本にはじまり、特に北海道内や千島列



展示室

島・サハリンといった北方圏の植物標本が充実しています。菌類標本庫は創立が札幌農学校と同じ1876年で、きのこ類はもとより、植物の病害となるウドンコ菌や銹菌などの宮部らによる膨大な標本コレクションを含む世界的なものです。海藻についても、宮部は日本のコンブ類の分類学的な基礎を固めたほか、1930年の理学部創設に際しては植物分類学教室を海藻研究の世界的拠点として育て上げる戦略を立て、成功させました。

1896年に松村松年が札幌農学校助教授に任官し、日本で最初の昆虫学教室が開設されました。以来、北海道大学は昆虫学のメッカとなり、現在に至ります。さまざまな学部16名ほどの昆虫学関連の教員がおり、100名近い学生が、分類学、生態学、進化学、行動学、分子生物学といった広範囲にわたる昆虫学を研究しています。「生物標本の世界」では松村コレクションの一部をはじめとする貴重な標本

の展示のほか、昆虫標本の採集方法や作成方法についても説明しています。

本学の魚類分類学の歴史は東北帝国大学農科大学時代に始まります。水産学科の疋田豊治は1913年にシヤマモを記載・命名しました。魚類標本庫は1935年に水産学部の前身である函館高等水産学校に始まり、水産学部付属の博物館・標本館として発展し、現在は総合博物館の分館として位置付けられています。国内はもちろん世界の海洋や淡水域から採集された、質量ともに世界的なコレクションとして知られています。深海性アンコウなどの希少種やサメ・エイ類などの大型標本、オホーツク海やベーリング海などの北方系魚類標本が充実しています。

阿部剛史
(研究部講師/海藻系統分類学)



菌類標本



昆虫標本



魚類標本

「北大の学び舎」連動ワークショップ(歯学部×総合博物館) 夏休みの自由研究に「歯」の模型をつくらう!

●2016年8月9日



ワークショップの様子

新設された北大の全12学部の教育・研究を紹介する「北大の学び舎」。その最初の連動ワークショップとして、8月9日(火)に「夏休みの自由研究に「歯」の模型をつくらう!」を開催しました。歯学部と総合博物館が共催したこのイベントには、事前に登録いただいた4名の小学生が参加しました。歯学研究科の佐藤嘉晃准教授による歯についての解説の後、紙粘土を使って歯の拡大模型を作りました。歯には口

の中に出ていて実際にモノをかむのに使う歯冠(しかん)とそれを支える歯根(しこん)があります。今回はカラフルな7色の紙粘土を組み合わせ、6歳臼歯(第1大臼歯)を作りました。真剣に作業をする参加者の皆さんとそれを熱くサポートする佐藤准教授と西川圭吾歯科技工士長(北海道大学病院・歯科診療センター・生体技工部)が印象的でした。仕上げに歯学部展示で歯やお口の全体像を確認して、ワークショップは終了。参加者の皆さんの素晴らしい自由研究になったのではないのでしょうか。

江田 真毅
(研究部講師/動物考古学)

「トピックス展示 ～むかわ町の化石たち～」

●2016年7月26日～8月31日



ハドロサウルス科恐竜の
大腿骨化石を囲む来館者

北海道大学総合博物館リニューアルオープン当日の7月26日(火)から8月31日(水)まで3階「古生物標本の世界」にて、トピックス展示としてむかわ町穂別の化石を紹介するコーナーを設置しました。現在研究中のハドロサウルス科恐竜の大腿骨や、2015年12月に新種として発表された海生爬虫類フォスフォロサウルスの複製標本、発掘調査で実際に使用した道具などを展示しました。むかわ町から産出した化石のホットな話題を来館者のみなさんにお届けできたのではないかと考えております。

2014年9月、北海道大学総合博物館とむかわ町は相互協力協定を結びました。これはむかわ町穂別の恐竜化石の発掘、研究、活用のために両者の連携を強化することを目的としたものです。この協定に則ってむかわ町では総合博物館の標本を使用した特別展「恐竜・絶滅ワニ展」や、総合博物館の小林快次准教授と当時北大に招聘されていた恐竜研究の大家フィリップ・カーリー教授を招いた普及講演会「世界の恐竜研究 最前線!!」を開催してきました。これらの催しは北大からむかわ町へヒ

トやモノが来る形式のものばかりでしたので、「今度はむかわ町から総合博物館に協力できないか」ということで、今回の展示を発案しました。

ももとは期間限定の単発の展示を想定していたのですが、展示内容のある程度の期間で入れ替え、その時々での大学での研究内容など様々な話題を柔軟に紹介できるコーナーにしてはどうかという小林准教授のアイデアをもとに「トピックス展示」として継続して活用していくことが決まりました。展示内容が変化していくので、繰り返し足を運んでくださっている来館者の方にも楽しいコーナーになるのではないかと思います。むかわ町の化石の展示が終わった後には、第2弾として学芸員実習の受講生が制作した展示が設置されました。今後の展示内容や期間、更新頻度については不確定な部分もありますが、化石展示の新しい見どころとしてご注目くだされば幸いです。

太田 晶
(理学院修士1年/むかわ町地域おこし協力隊)

「北大総合博物館×エルムの森」 プレ小展示

●2016年6月1日～7月29日

2016年6月、1ヶ月後に迫ったリニューアルオープン、ひいては総合博物館をより多くの方々に向けて発信する新たな試みとして、インフォメーションセンター「エルムの森」を会場に期間限定のリニューアル先行展示を行いました。「エルムの森」は北大正門横に位置し、地域の方や観光客が連日訪れているまさに北大の玄関口です。

会場にはカウントダウン日めくりやデジタルサイネージ、活動紹介のパネル等を設置したほか、博物館に収蔵されている標本から初公開のものも含め、選りすぐりのお宝標本を展示しました。

【展示物】 考古:遺跡出土のヒグマの頭骨、植物:戦前の国後で採集されたハルニレ、昆虫:アイヌキンオサムシとオオルリオサムシ、地球科学:地球第4のマグマ薄片、古生物:ピアルモスクスの頭骨化石、水産:鯨ひげを利用した杖、脊椎動物:エトピリカの頭骨

リニューアルを心待ちにしているという市民の方や観光客にお声をかけられることがあり、関心の高さがうかがえた一方で、初めて博物館を知ったという方もいらっしゃいました。今回のプレ小展示を通して博物館の魅力を感じていただき、リニューアル後に実際に来館されたという方がいらっしゃることを願っています。

高橋一葉
(研究支援推進員)

博物館実習

●2016年8月30日～9月2日、9月5日～8日



地学・古生物班が制作した示相化石の展示



鳥標本を製作

総合博物館では毎年、北海道大学の学生を対象にした学芸員実習を実施しています。実習は、学芸員養成課程のさまざまな科目を受講した後に、博物館の現場で実務を学ぶ科目として位置づけられています。

今年度は8月下旬から9月上旬の8日間、午前中の演習と、午後には地学・古生物、動物、映像・科学技術史資料という3班に分かれての実習というスタイルで行いました。実習生は、学部4年生から博士後期課程2年生まで学年も異なれば、専門分野も文系・理系とさまざまな14名でした。8日間という短期間では博物館活動の全てを習得するには限界があることと、また班メンバーの専門レベルに偏りが無いこと、所属する研究室では体験できない実習に取り組んでほしいことから、各自の専門分野以外の班での実習に臨みました。

午前中の演習では、中川光弘館長をはじめ、当館の教員全員が博物館におけるそれぞれの研究と教育、活動について紹介し、展示室やバックヤードを見学したり、実物資料に触れる時間を設けました。また、博物館事務係の五十嵐由美係長による博物館運営や事務スタッフとしての業務についての説明、研究支援推進員の西本結美さんと高橋一葉さんからの館内サインのパネル制作の実習も行われました。

地学・古生物班では、鉱物・岩石と古生物分野の実習を行いました。鉱物・岩石分野

では、山本順司准教授から当該分野の学校向け教材の開発や当館のリニューアルで重視したユニバーサル・デザインについて学びました。七輪でマグマをつくる実験は、他班のメンバーも見学し、身近な題材で本物にこだわり安全で安価な教材開発の一端を体験することができました。古生物分野では、越前谷宏紀研究員から、博物館における当該分野の研究・展示について学び、化石のクリーニングも体験しました。さらに、メンバーで議論を重ねて示相化石を解説する展示を制作し、3階展示室「古生物標本の世界」に設置しました。

動物班では鳥と昆虫の分野の実習を行いました。鳥類分野では、江田真毅講師から、標本受け入れ作業と標本作製について学び、データベースへの登録、譲渡し等許可申請書類の作成、そして鳥類の解剖と骨標本の作製に取り組みました。昆虫分野では、大原昌宏教授から標本の整理とデータベース作成について学び、未整理であった瀧澤コレクション40箱について整理し、ホームページで情報公開を行いました。

映像班では、映像や科学技術史資料の整理と調査を行いました。山下俊介助教と杉山滋郎研究員から、映像フィルムや写真資料の特徴と保管方法について学び、実際に本学理学部の牧野佐二郎研究室に残されたフィルムや写真、書籍など段ボール6箱分の資料を整理しました。ピネガーシンドロームと呼ばれる

フィルムの劣化を診断したり、フィルムの目録とショットリストを作成しました。

最終日の午後には報告会を開催し、各班が8日間に取り組んだ内容と考察を発表しました。発表会での意見交換や事後レポートからは、受講生達が、標本資料を未来に残していくための意義、その登録や保存がいかに丁寧に行われているかを理解し、それが根気のいる作業であり、ボランティアの協力が不可欠であることを実感したことがうかがえます。また、展示制作で意識すべき視点や留意事項、博物館のアウトリーチ活動への取り組み方の実際を学び、博物館スタッフが活動にこめた思いを深く認識したようです。

湯浅万紀子
(研究部教授/博物館教育学)



フィルムを整理・記録する映像・科学技術史資料班

「ランの王国」展 展示解説を担当して



来館者と対話しながら解説を行う

ミュージアムマイスター認定コースの一環として、環境科学院修士1年の和久井彬実さん、理学部2年の森本智郎さん、博物館ボランティアの方々と共に、企画展「ランの王国」の展示解説員を務めました。事前に企画展担当教員と展示解説担当教員から展示の概要や解説時の振る舞い等について指導を受け、全8回の解説対応に臨みました。これまで、私にとってランは未知の分野でした。しかし、ランの豊かな生き様は知れば知るほど面白く、図録やセミナー等を通して、楽しみながらランへの興味と知識を深めることができました。対応時に受けた質問は、回答内容と共に「Q & A」としてまとめ、他の解説員の方々と情報を共有しました。各回の終了時には教員にレポートを提出し、アドバイスを受け、次の対応へとつなげていきました。

実際に展示室に立つと、こちらから一方的に説明するばかりではなく、聞き手として、来館者が語ることを受け止める立場となることが多くありました。例えば、自宅で育てているランの香りの話、礼文島を旅した思い出など、みなさん嬉しそうに語ってくださいました。そのような対話の中から学ぶことも多く、有意義な時間であったと感じます。私たちと交流してくださった方々にとっても、この対話によって企画展を訪れた体験がより意義深いものとして心に残ってくれたら嬉しく思います。

今回の経験を通して、それまで一括りにして考えがちだった“来館者”が、一人ひとり異なる顔を持つ個人として捉え直すことができました。今後も、博物館が人と人の交流の場であることを忘れずに、博物館の活動に携わっていきたいと思います。

増田彩乃
(理学院修士1年)

客員教員紹介

●リチャード・レッシェン博士
Richard Alan Leschen



レッシェン博士は、ニュージーランド・オークランドのLandcare Research 研究所に所属する昆虫学研究者です。甲虫類が専門で、キノコと関係する甲虫類を主に研究されていましたが、現在は甲虫類の高次分類系統を広く扱う世界的な権威になられています。滞在期間

は2016年6月27日から9月2日までの68日間。総合博物館滞在中は特任教授として、ニュージーランドのエンマムシに関わる分類学の問題について、私との共同研究に従事しました。東京と京都へも遠征され、ハネカクシ談話会と京都大学での講演を行われました。北海道大学では農学院昆虫体系学研究室のゼミ、バイオメティクス研究会で講演され、国際ワークショップ「Cucujiformia Workshop」を開催し講師を務められました。

レッシェン博士は、趣味でギターを演奏され、滞在中、北大の音楽サークル「ブルグラス」に所属する学生と交流し、8月19日には「Hokkaido Jazzgrass Trio」と題したコンサートを総合博物館「知の交差点」で開催しました。多才な博士の人柄に、多くの博物館職員、ボランティアが魅了され、研究面、文化面で充実した交流がなされました。

大原昌宏
(研究部教授/昆虫体系学)

客員研究員紹介

●金成顕博士
Kim Sunghyun



金成顕博士は、韓国環境生物資源館(NIBR: National Institute of Biodiversity Resources)の研究員をされています。NIBRと総合博物館は2008年からMOUを締結しており、研究及び人的な交流を継続しています。金博士はサバティカルとして2016年9月5日から2017年3月3日まで総合博物館に客員研究員として滞在し、主に専門の猛禽類と里山の研究と博物館活動の研修に従事されます。

流暢に日本語を使われる金博士は、今回の6ヶ月に渡る日本での滞在中、さらに日本語に磨きがかかることに違いありません。韓国最大の自然史博物館であるNIBRと北大総合博物館を繋ぐキーパーソンになることが両館からも期待されています。

大原昌宏
(研究部教授/昆虫体系学)

ミュージアムカフェ

金曜ナイトセミナー & コンサート



山本准教授によるセミナーの様子

7月26日の総合博物館リニューアルオープンから、6月～10月の期間の金曜日の夜は午後9時まで開館時間を延長することとなりました。この新たな試みをより多くの方に知ってもらうため、「ミュージアムカフェ 金曜ナイトセ

ナー & コンサート」を「知の交差点」コーナーで開催することとしました。夜の7時から8時半まで、隣にあるミュージアムカフェ「ぼらす」で購入できる飲み物を片手に、秋の夜長のセミナーで勉強や音楽に親しもうという企画です。セミナーは、8月26日に第1回目が催され、以下第5回まで開催いたしました。

ミュージアムカフェ金曜ナイトセミナー(第2、4金曜日)

- 第1回** 8月26日
高橋英樹(北大総合博物館/植物体系学)
「利尻・礼文の植物保全研究
一人間はどこまで自然に手を出せるのかー」
- 第2回** 9月9日
大原昌宏(北大総合博物館/昆虫体系学)
「北海道大学総合博物館所蔵
一昆虫標本について」
- 第3回** 9月23日
山本順司(北大総合博物館/地球科学)
「この地球にあるマグマの出口

～5つ目を見つけました～

- 第4回** 10月14日
小林快次(北大総合博物館/古生物学)
「おとなの夜の恐竜学」
- 第5回** 10月28日
阿部剛史(北大総合博物館/海藻系統分類学)
「日本海は進化のゆりかごー海藻と貝形虫ー」

第1、3、5金曜日はセミナーではなく、学生やボランティアによる様々なアクティビティの公開を進めています。これまでは、北大交響楽団とチェンバロ・ボランティアによるジョイントコンサート(オーガナイザー:総合化学院修士1年町田 崇さん)やHokkaido Jazzgrass Trio ブルグラスとジャズコンサートなどが開かれました。これからは落語や演劇など多様な活動による「知の交差点」の利用を期待しています。

大原昌宏
(研究部教授/昆虫体系学)

北大エコキャンパス観察会

ーサクシュコトニ川沿いの遺跡・花・虫ー

●2016年6月25日



国連人間環境会議が1972年6月に開催されたことを記念して、日本では6月を環境月間に指定しています。期間中、各地で環境に関連する様々な行事が開催され、総合博物館でも毎年「北大エコキャンパス観察会ーサクシュコトニ川沿いの遺跡・花・虫ー」を実施しています。

今年6月25日に開催し、総合博物館の高橋英樹教授(植物体系学)、大原昌宏教授(昆虫体系学)、江田真毅講師(動物考古学)の3名が、構内を流れるサクシュコトニ川に沿って、それぞれの分野の解説をしながらキャンパスを案内しました。この日は朝から小雨が降るあいにくの天気でしたが、それでも16名の方々が参加しました。

サクシュコトニ川周辺には縄文時代晩期(約2600年前)から人々が生活をしていて、当時の生活跡がいくつも残されています。人文・社会科学総合教育研究棟入口には、同棟の下を発掘調査した際の地層の剥ぎ取り標本と炉跡が展示してあり、図書館周辺の川辺か

らは擦文文化期の住居址やアイヌ文化期の漁獲施設などが見つかっています。

雨のため、虫たちの姿はほとんど目にする事ができませんでしたが、葉の8割が虫こぶで覆われたケヤキを観察したときは、その異様に驚きました。虫こぶとは雪虫のなかまのアブラムシが植物の葉組織を操作して膨らませ、その中を住処として使っているもので、葉の上で瘤状の果実のように見えます。

構内いたるところに植えられている樹木についても興味深いエピソードが多々あり、クロビイタヤの前では北大植物園の生みの親である宮部金吾について、クラーク像の前ではクラーク博士と植物学の繋がりがありました。

例年と比べると参加者は少なめでしたが、その分講師との距離がぐっと近く、質疑応答が活発な観察会となりました。

西本結美

(研究支援推進員)

「エルムの杜の宝もの」 道新ぶんぶんクラブとの 共催講座を開催

総合博物館では2009年度から北海道新聞ぶんぶんクラブとの共催講座「エルムの杜の宝もの」を開催しています。道新ぶんぶんクラブ会員を対象にした講座であり、北海道大学の研究を知っていただく機会になっています。

2016年度は、当館のリニューアルオープン前は、考古学と建築に注目して北大構内を巡るツアーを開催しました。リニューアルオープン後は、企画展示と常設展示の解説、北大に残る記録映像の解説付き視聴会、小中学生と親子を対象に恐竜研究のホットな話題を解説する講座を開催しました。毎回、多くの方が熱心に参加され、展示解説ボランティアの協力により運営されました。

5月14日 北大構内ツアー 遺跡編
江田真毅(動物考古学)

6月25日 北大構内ツアー 建築編
池上重康(近代建築史学)

8月27日 リニューアル記念 企画展示・常設展示解説
高橋英樹(植物体系学)・湯浅万紀子(博物館教育学)

9月3日 記録映像から見る北大
山下俊介(映像資料学)

10月15日 小中学生親子対象 恐竜教室
小林快次(古生物学)

湯浅万紀子

(研究部教授/博物館教育学)



江田講師による北大構内ツアー-遺跡編
(写真提供:道新ぶんぶんクラブ)

平成28年4月から平成28年9月までの
主な出来事

- 4月1日 今村 央 水産科学館長 就任
技能補助員 荒木久美子さん
着任
- 4月11日 2015年度北大総合博物館年次報告会
- 5月1日 技術補助員 久井貴世さん 着任
- 5月20日 水産科学館水産生物標本館
竣工式
- 6月20日 学術研究員 菊田 融さん 着任
- 6月27日 特任教授 RICHARD ALAN LESCHEN
(リチャード アラン レッセン)先生
着任(～9/2)
- 7月25日 報道関係者向け総合博物館
内覧会
- 7月26日 総合博物館リニューアルオープン
記念式典・内覧会・記念祝賀会
- 7月31日 「シェイクスピア、ポプラチェンパロと
出会う」～レクチャー付きコンサート～
- 8月2日 駐日ノルウェー共和国大使一行
(10名) 解説
- 8月5日 リニューアルオープン記念企画展示
「ランの王国」展 開催(～9/25)
ミュージアム・カフェ ナイト コンサート
北海道大学交響楽団と博物館
チェンパロ・ボランティアによるジョ
イントコンサート
- 8月19日 國學院大學博物館実習一行
(33名) 解説
ミュージアムナイトコンサート
HOKKAIDO JAZZGRASS TRIO
によるブルーグラスライブ
- 8月25日 北京科技大学国際コース学生一行
(25名) 解説
- 8月30日 参議院議員、秘書官視察一行
(4名) 解説
- 9月5日 客員研究員 金 成顕(キム ソンヒョ
ン)さん 着任(～3/3)
- 9月7日 台湾大学博物館群一行
(4名) 解説
- 9月9日 江別市教育研究会社会(中)部会
一行 (21名) 解説
- 9月23日 九州大学施設部一行 (5名) 解説
- 9月30日 金曜ミュージアムコンサート
北大ブルーグラスコンサート

お礼

下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理
製作・展示準備等でご協力いただきました。
謹んでお礼申し上げます。(平成28年4月1日
～平成28年9月30日)

(敬称略)

●植物標本

阿部桂子, 蝦名順子, 大原和広, 小笠原 誠,
加藤康子, 桂田泰恵, 加藤典明, 金上由紀, 児
玉 諭, 嶋崎太郎, 須田 節, 高橋美智子, 徳原
和子, 藤田 玲, 船迫吉江, 星野フサ, 細川音
治, 村上麻季, 吉中弘介, 与那覇モト子, 和久
井彬実

●菌類標本

石田多香子, 齋藤美智子, 高田和子, 谷岡み
どり, 外山知子, 星野フサ, 村上さつき

●昆虫標本

青山慎一, 秋元優希, 伊藤優衣, 梅田邦子, 川
田政, 喜多尾利枝子, 久万田敏夫, 黒田 哲,
斉藤光信, 櫻井正俊, 佐藤國男, 佐藤諒一, 志
津木眞理子, 高品裕太, 高橋誠一, 竹本拓矢,
間田高宏, 鳥山麻央, 中西茂弘, 永山 修, 伴
光哲, 古田未央, 牧田 智, 松本千春, 松本侑
三, 村田真樹子, 村山茂樹, 山本ひとみ, 吉岡
秀晟, 芳田琢磨

●考古学

青木大輔, 浅尾佳里, 安 翔宇, 五十嵐大将,
石場ゆり, 稲田 薫, 岩波 連, 江口曉彦, 翁
哲毅, 大泰司紀之, 奥山杏南, 神田いづみ, 木
内和秀, 木村則子, 熊倉大騎, 黒田充樹, 斉藤
理恵子, 榎山 匠, 佐々木征一, 佐藤美恵, 末
永義園, 鈴木 諒, 隅田悠花, 武石にれ, 田中
公教, 田中望羽, ツォグトパーター チンゾリグ,
中井勇海, 長瀬のぞみ, 中野 系, 成田千恵子,
西本結美, 二瓶寿信, 林 礼斗, 林 和花奈, 東
田有希, 平尾嵩志, 平野このみ, 水澤こと, 宮
崎真結, 森本智郎

●メディア

伊藤優衣, 織田さやか, 卓 彦伶, 三嶋 涉, 孟
洋洋, 山本ひとみ

●化石

朝見寿恵, 荒山和子, 安 翔宇, 飯島正也, 池
上 森, 石崎幹男, 石橋七朗, 池田雅志, 市橋
晃弥, 伊藤麻衣, 今井久益, 白田みゆき, 岡野
忠雄, 尾上洋子, 加藤利佳, 金内寿美, 上川
伶, 木村聖子, 木村映陽, 久保孝太, 久保田
彩, 近藤知子, 近藤弘子, 酒井 実, 榎山 匠, 佐
藤美恵, 鈴木 諒, 高崎竜司, 高田健太郎, 田
中公教, 田中望羽, 千葉謙太郎, ツォグトパー
ター チンゾリグ, 寺田美矢子, 寺西育代, 寺西
辰郎, 時永万音, 内藤美穂子, 中井勇海, 長瀬
のぞみ, 長野あかね, 中野 系, 中谷内 奎, 那
須遥香, 八丁目清之, 八丁目文枝, 福田祐生,
古井 空, 堀 睦, 前田大智, 森 淑子, 山下暁
子, 吉田純輝

●北大の歴史展示

寺西辰郎

●展示解説

在田一則, 石橋七朗, 飯島正也, 石黒弘子,
生越昭裕, 河本恵子, 菅 妙子, 児玉 諭, 堺 俊
樹, 笹谷幸恵, 高崎竜司, 田中公教, 千葉 太
郎, 塚田則生, 寺西辰郎, 中野 系, 成田敦史,
西川笙子, 沼崎麻子, 濱市宗一, 松田義章, 村
上龍子, 孟 洋洋, 森 淑子, 山崎敏晴, ロバー
ト・クルツ

●翻訳

上川 伶, ロバート・クルツ

●平成遠友夜学校

大山圭也, 柿本恵美, 上川 伶, 佐伯圭一郎,
城下治子, 田中敏夫, 中井玉仙, 沼田勇美, 牧
野小枝子, 増田文子, 松田大徳, 山岸博子

●4Dシアター

田中裕子, 塚田則生, 平田栄夫, 福澄孝博, 牧
野小枝子

●ポプラチェンパロ

浅川広子, 石川恵子, 小野敏史, 清水聡子, 新
林俊哉, 高橋英悠, 中村会子, 新妻美紀, 野中
敏明, 野村さおり, 松田祥子, 雪田理菜子

●図書

岡西滋子, 児玉 諭, 今野成捷, 齋藤美智子,
須藤和子, 高木和恵, 田端邦子, 中井稚佳子,
沼田勇美, 久末進一, 鮎田久意, 星野フサ, 本
名百合子, 宮本昌子, 村上龍子, 安田 正, 山
岸博子

●第二農場

石田多香子, 稲場良雄, 城下治子, 高井宗宏,
寺西辰郎

●ハンズオン

加藤典明, 久保直紀, 今 布咲子, 嶋野月江,
下川千尋, 鈴木理花子, 須藤和子, 沼崎麻子,
福澄孝博, 古田未央, 増田彩乃, 山岸博子

●展示改訂(地学)

在田一則, 塚田則生, 寺西辰郎, 松田義章, 三
嶋 涉

●きたみてガーデン

芦澤万里音, 阿部 悠, 伊藤響子, 今井琴雅,
上野 綾, 海老名光希, 大塚美咲, 大原萌未,
小森安奈, 近藤 緑, 城間拓也, 玉田聖司, 濱
尾瞳子, 古館 匠, 星野愛花里, 堀川さゆみ, 水
谷史絵, 松下周平, 谷中英明

●水産科学館

櫻井慎大, 佐々木嘉子, 宍 世華, 菊地 優, 井
口詩織, 川畑 達, 木村克也, 高岸愛実, 田中
友樹, 中原隆史, 川原田峻平, 寺塚真奈美, 外
山太一郎, 岸本早貴, 木村まい, 宍戸太郎, 高
橋雄大, 圓谷千夏, 武藤岳人, 屋敷遙香, 小林
奈緒

企画展示「ランの王国」

●展示解説

高田和子, 村上さつき, 村上龍子, 岡西滋子,
吉中弘介, 細川音治, 星野フサ, 船迫吉江, 田
端邦子, 笹谷幸恵, 児玉 諭, 石田多香子

●調香体験ワークショップ

村上さつき, 石田多香子, 森 淑子, 高田和子,
鳥山麻央, 山本ひとみ

ご協賛のお礼

総合博物館では、リニューアルオープンに伴い、北海道大学の最新の研究や教育の成果について、より身近にふれ
ていただくためのスペース「知の交差点」を新設いたしました。本事業の趣旨をご理解いただき、ご寄附を賜りました
皆様に厚くお礼申し上げます。いただいたご寄附は、弊館の事業に有効に活用させていただきます。

総合博物館スタッフ一同、より充実した運営を展開できるよう努力してまいります。今後ともお力添えいただきますよ
う、心よりお願い申し上げます。

総合博物館へのご協賛に関するホームページ <http://www.museum.hokudai.ac.jp/outline/support/>

[表紙写真] リニューアルオープン当日の総合博物館